

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

氏 名 古谷 裕美

論文題目

ヘミングウェイ・テキストにおける身体表象分析
— 権力・棄却・パフォーマンスティヴィティ

論文審査担当者

| | | |
|-----|-----------|-------|
| 主 査 | 名古屋大学教授 | 松下千雅子 |
| 委 員 | 名古屋大学教授 | 村主 幸一 |
| 委 員 | 関西学院大学准教授 | 小笠原亜衣 |

1. 本論文の構成と概要

本論文は、ヘミングウェイ・テキストに描かれた「逸脱した身体」について、ジュリア・クリステヴァが定義した「オブジェクション」という概念を用いて分析したものである。序章と結論を含めた全 10 章からなり、序章では本論文の趣旨と研究の中心的な概念である「オブジェクション」を説明している。第 1 章から第 8 章ではヘミングウェイの代表的な作品である『日はまた昇る』、『武器よさらば』、『インディアン・キャンプ』、『キリマンジャロの雪』、比較的マイナーな作品である「アルプスの牧歌」、「神よ陽気に殿方を憩わしめたまえ」、「蝶々と戦車」、そして死後出版された『エデンの園』の計 8 作品を主な分析対象として、そこに描かれる逸脱した身体がオブジェクトとして棄却されることにより、テキストの意味生成が行われるプロセスを明らかにしている。

序章では、ヘミングウェイ・テキストに関する主要研究の変遷をたどり、研究の位置づけがなされる。本研究は 1984 年の『エデンの園』出版以降に行われるようになったジェンダー・セクシュアリティ批評の流れを汲むものであるが、メアリ・ダグラスの排除の理論と、それに基づくクリステヴァの「オブジェクション」という概念を用いて、ヘミングウェイ・テキストに描かれる逸脱した身体を「オブジェクト」として捉え、そうした身体がいかに棄却、つまり「オブジェクション」されるかを論じた点が独創的である。クリステヴァによれば、言語記号による社会の形成は「オブジェクト」としての母の身体を反復的に棄却することで可能となるが、排除されたはずの前=対象（オブジェクト）は恐れや不安を掻き立てる存在として回帰してくる可能性がある。そのため「オブジェクト」は魅惑と恐怖という両義性を内包する存在とされているが、ヘミングウェイ・テキストで繰り返し描かれるグロテスクな身体は、読者に恐怖をあたえつつも魅惑的である点で、まさに「オブジェクト」であるといえる。

第 1 章では、ヘミングウェイの初期の代表作である『日はまた昇る』を取り上げ、性的に奔放なフラッパー、ブレット・アシュレイの身体表象とジェイクの語りの効果についての分析が行われた。視線という観点から考察することにより、ブレットが常に「見られる対象」として客体化され、その身体が男性の欲望を投影するものとしてエロス化されていることを明らかにした。その上で、このようにブレットをエロス化するジェイクの眼差しに、支配構造を生み出すヘテロセクシズムが反映されていることを指摘した。

第 2 章と第 3 章では、サイードの「オリエンタリズム」の概念に基づき、ヘミングウェイ・テキストにおけるトルコ地域の描写がオリエンタリズム的であることを指摘したうえで、それが「オブジェクト」として棄却されるプロセスが論じられている。「キリマンジャロの雪」の分析では、トルコ/コンスタンチノーブルは暴力、汚穢、性的倒錯、去勢、死を象徴しており、ハリーがトルコでの苦しい出来事を語ることは、壊疽による痛みや死臭など耐え難い苦しみを抱えたハリーにとってカタルシスの効果を持ち、「オブジェクト」としての自分の脚を、「おぞましい」トルコ表象に投影して棄却していると結論付けた。第 3 章では「神よ陽気に殿方を憩わしめたまえ」を研究対象とし、男性器を自身で去勢する少年の身体表象が「オリエンタリズ

ム」に基づくイスラム教の宦官のイメージと関連付けて分析された。

第4章と第5章では、「おぞましきもの」としての妊婦の表象について論じられた。ヘミングウェイの描く妊婦は生と死の狭間に位置する恐怖の存在として描かれているが、難産やグロテスクな帝王切開の場面、「オブジェクト」としての妊婦の身体描写を通して、その配偶者やパートナーの男性性が脅かされるというジェンダーのねじれ現象が指摘された。「インディアン・キャンプ」論を展開した第4章では、白人医師とアメリカ先住民男性との間の権力闘争と、それを基盤として白人少年のアイデンティティが形成されていることが明らかになった。第5章では、『武器よさらば』におけるコントロール不可能な妊婦の身体が、嫌悪や恐怖の対象として、つまり「オブジェクト」として提示されており、その身体表象には男性の畏怖心が投影されていることが論じられた。

第6章は、「アルプスの牧歌」における女性の損壊遺体と夫の社会的アイデンティティの構築の関連性についての考察である。凍てついたまま保管されていた女性の遺体は、恐怖や不快感を喚起するほどに顔が損壊しており、人々に恐怖を引き起こす「オブジェクト」として描出されている。本論文は、女性の損壊遺体をめぐり、周囲の人々によって不確かな言説が生み出され、言説の上書きによって夫の異常なセクシュアリティがパフォーマンス的に構築されていくプロセスを明らかにしている。つまり、女性の遺体はスキャンダラスな言説を生み出す源泉となっており、夫であるオルツはアブノーマルなセクシュアリティを持つ野獣として、不確かな言説に基づいて異常性が形作られていく。亡くなった妻の遺体は空虚なキャンバスとして、夫オルツの社会的立場を投影し、オルツの虚像が形成されていく上で常に陰画として機能している。このように男性の陰画として象徴的に表象される女性の身体は、言語社会における「現実界」や前=対象的な「オブジェクト」として機能していると指摘した。

第7章では、「蝶々と戦車」を取りあげ、射殺されたフリット・キングの傷病に苛まれた身体に着目しながら、逸脱した男性の身体が性的逸脱や去勢と関連付けて表象されていることについて分析が進められる。フリット・キングの酒場での振る舞いや、フリットという俗語が内包する意味から、彼がホモセクシュアルである可能性と、彼が射殺された背景にはホモフォビアが存在する可能性を示唆した。病に対するフォビアや同性愛嫌悪から射殺（排除／棄却）された男の身体はまさに「オブジェクト」として表象／棄却されていると論じた。

第8章では、『エデンの園』を分析対象とし、編者によるオリジナル原稿からの削除の効果について分析を進めた。性規範を逸脱したキャサリンが「オブジェクト」として追放されるという結末は編者ジェンクスによるもので、彼自身の同性愛嫌悪を内面化したものである。ジェンクスがオリジナル原稿から削除したニックとバーバラのプロットでは、ヘミングウェイの分身として様々な短編作品に登場したニック・アダムズを想起させるニック・シェルダンという青年が登場している。彼は髪を伸ばして女性化し、アメリカ先住民のような浅黒い肌色によって人種化されており、キャサリンよりも先鋭的な性的実験を行っている。異性愛規範的なヘミングウェイ像を守りたいとする編者の意図によって、「オブジェクト」として完全に削除されたニックとバーバラのプロットだが、削除された箇所は空白として提示されることになり、様々な言説の書き込みの場となって、逸脱した性についての言説／批評を生み出し続けている点を指摘した。

2. 本論文の評価

ヘミングウェイの描く「逸脱した身体」はハードボイルドな作風を体現するかのごとく、冷血なまでにグロテスクで残酷な姿をさらし、またある時には「物」のように扱われ、様々な意味記号を反映している。傷病や損壊、身体変容によって逸脱した身体は、いわゆる「従順ではない身体」として提示され、性的マイノリティや有色人種の抑圧された状態を投影するなど、権力や権威からの疎外を表現する手段として描かれており、去勢不安、異人種性、倒錯性などに関連付けられる場合が多い。本論文は、このような逸脱した身体を考察したものであるが、単に周縁化された身体表象に光を当てただけでなく、こうした逸脱した身体こそが、主要登場人物の陰画として、その主体性の構築に寄与し、ヘミングウェイ・テキストの主題を形作っていることを明らかにした点が高く評価できる。本研究においては、一般的な論評から排除されてきた解釈やテキストの再評価を行い、これまで主流とされてきたヘミングウェイ作品や登場人物を対象とした研究の行き詰まりを打破することに成功している。

フィリップ・ヤングに代表される「コード・ヒーロー」論が主流を占めていたヘミングウェイ批評は、1984年の『エデンの園』の出版によりジェンダー・セクシュアリティに注目する批評へと大きく舵を切った。本論文は基本的にその延長線上に位置づけられるが、本論文の特徴は、80年代に盛んに行われた伝記研究でも、90年代以降に行われたテキスト分析でもなく、テキストの意味生成のプロセスに主眼をおいている点である。このプロセスを明らかにするために、「アブジェクション」の概念が効果的に用いられている。つまり、本論文では「物自体」あるいは「おぞましきもの」として描かれた逸脱した身体が棄却されることによって意味生成がなされていることを明らかにしたわけだが、このことは、本論文が文学作品の研究にとどまらず、テキストのあり方そのものに切り込みを入れ、文学研究の新たな地平を拓いたことを意味している。この特徴は、「アルプスの牧歌」について論じた第6章にとりわけ強く現れており、これが本論文でもっとも優れた章であるといえる。この章はすでに査読付き学会誌『ヘミングウェイ研究』No. 18 (2017)に掲載された申請者自身の論文をもとに加筆修正したものであることから、これが優れた論考であることは明白である。

本研究のもう一つの優れた点は、第6章と第8章においてヘミングウェイのオリジナル原稿を参照したことである。ヘミングウェイの未出版のオリジナル原稿は、ボストンにあるJFケネディ図書館に所蔵されており、閲覧可能ではあるものの、複写は許されない。また、遺族の意向によりオリジナル原稿を引用し出版することも固く禁じられている。そのため原稿を研究するためには直接ケネディ図書館に赴き、パソコンを持参して自ら写していくしかなく、それにはかなりの根気を要する。原稿研究は『エデンの園』の死後出版以降、ヘミングウェイ研究を支える大きな柱の一つとなったが、そのためのハードルが高いことから、原稿に直接アプローチする研究者の数は未だにそれほど多くはない。しかしながら、オリジナル原稿にはヘミングウェイ・テキストに対する新たな解釈を可能にするための未発見の事柄が多く眠っていると考えられる。本研究の第6章において、申請者はヘミングウェイ自身による書き直しのプロセスを追うことで意味生成のプロセスを明らかにすることができた。また第8章ではジェンクスの編集を経て出版された小説と、ヘミングウェイ自身が残した未出版部分を比較することで、ジェンクスによる原稿の解釈と編集の意図を明らかにすることができ、メタ批評的な分析を行うこともできた。このことは、ヘミングウェイ批評にとって極めて重要な功績だといえるだろう。